

2022年3月6日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 篠田 顕

奏楽 鬼頭容子

前 奏

招 詞

I コリントの信徒への手紙 第6章 19節-20節

讃美歌

讃美歌 21-149-1 (わがたまたたえよ)

交 読

詩編 第16篇 (p. 16)

祈 禱

聖 書

マルコによる福音書 第16章1~8節

(新約 p. 97)

讃美歌

讃美歌 21-300-1 (十字架のもとに)

説 教

「復活してここには」

マルコによる福音書はイエスさまの甦りの出来事を最初に語る福音書であり、一番古い時代に書かれたものです。昔は、書かれていることも素朴で、どの福音書よりも短いために、他の

福音書の抜粋であるかのように取り扱われたこともあるようです。必ずしも重んじられなかったマルコ福音書が、実は、主イエス・キリストのみわざと言葉を記す福音書のなかで、最も早く生まれ、マタイやルカ、あるいは、もしかしたらヨハネ福音書を書いた人でさえ、このマルコを読んで自分の福音書を書いたのではないかと考えられる。特に、マタイ福音書とルカ福音書は、マルコなしでは成り立たなかった。それを言い換えれば、わたしたちの教会の、最初の歴史を作っていた仲間たちの中で、この主イエスは誰か、ということ、どうしても書き留めなければならないという思いを抱いたマルコという人がいた。その人が精魂を傾けて、この主イエスの物語を書き始めました。今日最後の第 16 章で、9 節から後は括弧になっています。理由は、マルコによる福音書の最も古いものには、9 節以下はなかったと考えられるからです。9 節以下は後の教会が書き加えたものです。どうして書き加えたかというと、8 節までで終わっているのはおかしい。だから 8 節までで書き終えたのではなくて、ここで、何かの理由で中断したのだと、多くの人が考えたようです。ではどうして 8 節で

中断したのか。昔の、この福音書を書き記した巻物が、9節以下で切れてしまったのではないか、というようにいろいろと推測しますが、証明できません。もしかしたらマルコは、8節できちんと書き終えたつもりで、ここで筆を止めたと考えることもできます。いずれにしても、もともとは、主イエスの墓が空っぽだったという記事で終わります。

けれど、何もかも空っぽだったというわけではありません。お墓の中に響いた言葉があります。「あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない」。主はよみがえって、ここにはおられない。空っぽで何もないのではない。この言葉が響き渡り、空虚な墓を満たしている。あなたがたは、ここにナザレのイエスを捜しに来たのか。だが主イエスは、ここにはおられない。甦られたのだから。

ここですぐに分かるのは、登場するのは女性たちだということ。少なくとも、イエスさまが甦られて、そのお墓が空っ

ぽだったということの証人になったのは、女性たちです。その点について、教会を批判した人たちもいたようです。いろんな理由で教会を攻撃したとき、その最も大きな問題は主イエスの復活でした。そんなことはあり得ないと、何とか批判したかった。何とかして、復活信仰を叩き潰そうとした。その中のひとつの有力な論拠としたのは、イエスさまが甦られたというのは偽りである、その理由は、その証人が女性たちだけではないか。女性の発言などあてにならない、と言ったようです。女性は社会的に証人の場に立つにふさわしくないとされていました。これは当時の社会で、いかに女性たちが人として重んじられなかったかということの証明です。けれど、福音書はそんなことは問題にしない。だから無理に男性の証人を立てる必要もない。

もっと言えば、第 15 章の十字架の場面でイエスさまが十字架の上で息を引き取られた時、それを見守っていたのは女性たちであったと、マルコははっきりと書いています。丁寧にも、イエスさまの埋葬の時、立ち合っていたのも女性たちであったと、

その度に名前を書きます。この第 16 章の 1 節でも名前を書いています。くどいくらいです。どうしてなのか。ひとつには明らかに、このマルコによる福音書が書かれ、読まれていた教会に、こうした女性たちが知られていたからだろうと思います。この福音書が読まれる礼拝のなかに同席していたかもしれません。イースターの朝になると、何度聞いても聞き飽きないイエスさまのお墓を訪ねた話を、その女性たちから聞いたのかもしれません。だからある人は言います。どうして女性たちの名前が繰り返し記されるのか。男性の弟子たちは、ここに誰もいなかったということを、繰り返し強調している。ここに名前が記されるのは、女性たちだけで、男性は皆逃げたのだと語る。その女性たちの、主イエスに対する変わらない(愛の)まなざしのなかで、主イエスの受難と、葬りと、甦りが起こったということをマルコは書いている。これもまた、人々が重んじない者たちを、心をつくして愛された主イエスにふさわしいことであったかもしれません。

マルコによる福音書は、こうした女性たちのことを第 15

章の 41 節で、こう紹介しました。「イエスがガリラヤにおられたとき、イエスに従って来て、世話をしていた人々である。なおそのほかにも、イエスと共にエルサレムに上って来た婦人たちが大勢いた」。特にそのなかで、イエスさまにいちばん近くいた人たちは、イエスさまのお世話をしていた。毎日のイエスさまの日常生活のお世話です。食事の準備も洗濯もしたでしょう。汗と埃にまみれた、主イエスのおからだを自分たちの手で洗ったり、拭いたりしたかもしれません。そのイエスのおからだは、十字架にかけられ、傷つき、遂に息絶えた。そのおからだは、アリマタヤのヨセフによって引き取られて、葬られるとき、婦人たちは、手を出したいと思いながら手を出すすべがなかったでしょう。罪人の死体を、十字架の上にほったらかしにしたまま、安息日を迎えてはならないと人々が考えたからです。第 15 章の終わりは、マグダラのマリアと、ヨセの母マリアとが、そのイエスが納められた場所を、見守っていたと書いています。これは想像ですが、おそらく葬りの間にも、こうした女性たちは、とうとうイエスさまのおからだを清める暇もなく葬られてしまった。安息日が過ぎた

ら、働くことが出来る日がきたら、真先にお墓に行って、わたしたちの務めを果たしましょうねと、小さな声で言い交わしたかもしれません。

安息日が過ぎて、日が暮れる。ユダヤ人の一日の数え方では日が暮れると、もう次の日です。店が開けば大急ぎで香油を買いに行った。夜明けを待って、夜明けとともにお墓に行きました。マルコはここで、とても丁寧に「安息日が終わると」と書いた後に、もう一度2節で、「週の初めの日の朝のごく早く」と書いています。日曜日の朝の出来事です。二千年前の日曜日の朝、甦りの朝は、このように明けました。行く途中で、ふと気がつきます。あのお墓の前に大きな石があった。どうしようか。助けてくれそうな人がいたら、手伝ってもらうしかない。けれど行って見たらすでに、その墓石は動いていた。びっくりして、中に飛び込んだ。彼女たちにとって、見ようと思ったのはイエスさまのおからだだけだったはずです。死体だけです。わたしたちも、親しい者を何人も失ってきました。そして、一番つらいのは、死んだ者のから

だをもう一度、生き返らせるわけにはいかないということです。眠っているように横たわっていても、呼びかけても返事をしなくなってしまった。けれど、彼女たちは、このイエスさまのおからだを愛しました。そのことだけに思いを集めていました。それが、なくなってしまうていた。石がどけられていたところではない。死が、どこかへ吹っ飛んでしまった。あの方は甦って、ここにはおられない。女性たちが、恐れに満ちたのは当然です。どうして、そこで信仰を持たなかったのか。どうして、喜びに溢れなかったのか。どうして、恐れおののいて、逃げ出しさえしたのか。それは、死が打ち碎かれるということの、本当の恐ろしさと、厳しさを知らない者の問うことです。死を打ち碎くことのできるのは、神ご自身です。死の碎かれるとこと、神が生きて働いておられる。〈おそれ〉を憶えない人はいないはずです。

ただ、ここで問題が残ります。女性たちがすっかり黙ってしまったことです。そうすると、お墓の中で、若者から聞いたあの命令は、どうなってしまったのか。ペトロに弟子たちに告げな



さい。主がもう、ガリラヤに先立って行っておられるのだから、あなたがたもガリラヤに急ぎなさい。その神の命令を、女性たちは伝えるのも忘れて黙ってしまったのか。そんなことはないと思います。女性たちは、きちんと耳にみ使いの言葉を聞き留めていたと思います。いいえ、耳の中でがらがん響いていたと思います。あの方は、復活なさってここにおられない。あのお墓が空っぽだった。恐れがとけていくときに、そのみ言葉が彼女たちの心と存在を浸すようになったところで、それこそ大きな声をあげてペトロのところに飛んで行ったと思います。そして言います。イエスさまがお甦りになった。あのガリラヤ、わたしたちのふるさとにイエスさまが先に行かれた。わたしたちは後からついて行く。

主は先にガリラヤへ行かれる。この「先に行かれる」というのは、もともと一つの言葉です。マルコ福音書が愛した言葉です。たとえば、最も印象深い言葉の一つは第 10 章 32 節で、マルコはこう書きました。「一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚

き、従う者たちは恐れた」。ここでも弟子たちは恐れた。イエスさまが先に立って行かれる、その後ろ姿にこころ打たれる。この時のイエスさまは十字架に向かって、決然として、歩みを起こされました。この言葉を、マルコが特に大切なこととして書き記したことは、明らかです。そしてここで、甦りの主が、またもや彼らに先立ちます。またもや彼らに先立って、主ご自身が、ガリラヤに帰られます。女性たちも、弟子たちも、その後ろ姿を見ながら、大急ぎでついて行きます。もう、イエスさまは歩き出しておられるのです。走っておられるかもしれない。わたしたちも急いで行かなければ、というのです。

ではなぜ、マルコはこの8節で終えたのか。どうして終えたのか。それはわたしたちに考えてほしいと思っているからではないか。女性たちは逃げてしまった、恐れに満ちて逃げてしまった。では、それからどうなったのか。それをわたしたちは知っています。甦られたイエスさまがどこにおられるか知っています。わたしたちと共に、このわたしと一緒にいてくださる。このわた

しを恐れになかに叩き込むのではなくて、わたしに対しても、イエスさまが先立って歩いて下さった。深く確かに、わたしたちに先立ってくださる、主イエスの現実がここにある。ペトロと弟子たちは明らかに罪を犯して、不信仰なままに、軽薄な思いのままに、故郷に走り帰ったかもしれない。けれど、主イエスの恵みは、そこで弟子たちをしっかりと受け止める。そして、私はあなたがたのために甦ったのだと言われます。

以前、マルコ福音書とローマの信徒への手紙との繋がりについてお話したことがあります。イエスさまがゴルゴタに向かわれる途中、十字架を背負いきれなくなった時、代わって担った人物、キレネ人のシモンです。このシモンは、ローマの信徒への手紙の第 16 章 13 節に出てくるルフォスの父であるとマルコが書いています。明らかにルフォスはローマの信徒への手紙のなかで登場していますから、ローマの教会の教会員だったのでしょう。そして、断言はできませんが、マルコによる福音書はローマで書かれたと言われます。紀元 50 年の後半から 60 年前半にかけて書

かれたのではないかと言われます。そうすると、ローマの信徒への手紙が書かれて間もなくのことになります。このマルコは心を躍らせて、パウロのローマの信徒への手紙を読んだ仲間のひとりではないか。そこでルフォスという名前を聞いた。そして自分の福音書の中にも書いた。自分と同じ教会員の名前を書いた。

マルコによる福音書は、誰が書いたのか不明確なところがありますが、マルコという名前の人に関係があることは確かなようです。マルコによる福音書の解説に出てくる話として、使徒ペトロが通訳を連れて伝道しており、その通訳がマルコという名前であったと言われます。このマルコがやがて、先生ペトロから、毎日聞かされている主イエスのことを聞いた通りに書き記して、これがマルコ福音書になったといえます。ペトロはガリラヤの漁師でしたから、言葉の知識はどうだったでしょうか。だから外国に行く時には、どうしても通訳が必要だった。マルコはその点、いささか知識があったのかもしれませんが。教養があったのかもしれませんが。年老いていく漁師ペトロ、今は伝道者になったペトロ

に従ったマルコが、どこへ行っても通訳をする。しかも通訳している時だけではなくて、自分が通訳するペトロの言葉、日常、旅をいっしょにしている間や、食事の間にも、ペトロは主イエスの話しかしなかった。それを聞いて書いた。ペトロはガリラヤで主イエスに、ついて来いと言われてついて行った。けれど、いつも過ちを犯した。間違えた。叱られてばかりいた。とうとう最後には、イエスを捨てて逃げ出した。女性たちはついて行ったのに、ペトロは逃げた。語るのも恥ずかしかっただろうと思います。けれど、主イエスは甦られたのちに、まずペトロに、ガリラヤに行きなさい、わたしも先に行っているからと、そう言ってくださった。そしてガリラヤの湖のほとりで、もう一度会ってくださり、もう一度一緒に食卓についてくださった。そして、ペトロに伝道の使命を託された。ある学者は、ルカが福音書のあとに使徒言行録を続けて書いたように、マルコも第二巻を書きたかったのかもしれない。この物語の更に書き続けるつもりだったのではないか。そうも考えます。

マルコは第二巻を書くことはできなかった。言い伝えによるとペトロはローマで、ネロ皇帝の迫害の時に殉教の死を遂げた。マルコは、自分の先生の殉教の姿を目の当たりに見たかもしれません。自分は生き残って、そのペトロから聞いた話を、もう自分が生きている間に書き残さなければ、後世に伝えることができないと思って、書いたのかもしれません。激しい迫害の戦いの中で、この言葉を書き記しました。望みの光をともしました。この頃のローマの教会の人びとは、時に地下の墳墓でしか礼拝をすることができなかつたと伝えられています。真っ暗なお墓です。その中で小さな灯をともし、迫害者の追手を恐れながら礼拝を続けた人たちは、そこで何を聞いたのでしょうか。お墓の中で言ったのです。主イエスはここにおられない。お甦りになった。墓の中で朽ちるのではない。わたしたちもまた、その主のいのちを、分かち合って生きることができる。だから、耐えた。この福音書もまた、もしかしたら、その墓の闇のなかで書かれた。書き得た。だから、教会は生きた。そして今、わたしたちも生きるのです。祈ります。

主イエス・キリストの父なる神さま、主の甦りのいのちを、  
今、高らかに歌うことができ、感謝いたします。心をひとつにし  
て互いのために祈り、またここに来ることができない者たちのた  
めにも、甦りの主を信じる慰めが深くあるようにと祈ることがで  
きますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。

アーメン

**讃美歌** 讃美歌 21-441-4 (ぬぐいたまえ)

**献金** 讃美歌 21-65-2

**報告** 週報の3頁を御覧ください。

**祈 禱** それぞれの場で黙禱をお願いします。

**主の祈り** 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

**祝 禱** 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。  
主なる神に仕え、隣人を愛し、  
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。  
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と

聖霊との親しき交わりとが、  
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>